

特集論文：「トラウマ」への学際的アプローチ

戦争によるトラウマと4つの戦争とアメリカ小説

野間 正二

元京都府立大学教授・元佛教大学教授

● 要約 ●

本論では、南北戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦、ベトナム戦争を扱ったアメリカ小説のそれぞれが、戦争によるトラウマを、どのように描いているかを検討し、そのトラウマがどのように読まれてきたかを考察した。南北戦争を描いた作品では、戦争トラウマはリアルに描かれているが、作品のテーマとはなっていない。成熟した大人になるための試練として肯定的に描かれ、読者もそのように受けとめてきた。ところが、第一次大戦中に戦争トラウマに対する世間の関心が高まり、第一次大戦と第二次大戦を扱った作品では、戦争トラウマの症状とそれがもたらす悲劇がテーマとして描かれている。だが、それは読者にはじゅうぶん伝わっていない。ベトナム戦争を扱った作品では、戦争トラウマとその悲劇は読者にも既知なものみなされていて、作品のテーマとはなっていない。戦争トラウマは、サスペンスとミステリーを構成している要素となっている。

● Key words : 戦争によるトラウマ, 4つの戦争, クレインの『赤い武功章』, フィッツジェラルドの「メイ・デー」, サリンジャーの「バナナフィッシュに最適の日」, オプライエンの『失踪』

人間福祉学研究, 13 (1) : 7-23, 2020

1. はじめに

本論では、戦争を経験することで生じたトラウマを、アメリカ小説はどのように描いてきたかを検証する。そしてそうした文学作品が、読者にどのように受容されてきたかを考察する。

戦場で戦闘を経験したとき、その経験はストレスとなり、何らかの精神的な傷をあたえるのは容易に想像できる。実際、すでに紀元前8世紀の英雄叙事詩『オデュッセイア』(Odysseia)には、主人公オデュッセウス(Odysseus)が戦場の再現現象であるフラッシュバックの経験や自分だけが生き残ってしまったという罪悪感を覚えたことが描かれている(Schiraldi, 2000 : 363)。英雄の

オデュッセウスですらそうなのだから、ふつうの人間にとっては戦場での経験が心の傷つく大きなストレスになるのは間違いない。

しかし戦場でのストレスから生じた心の傷であるトラウマは、戦争がもたらす負の側面として捉えられてきた。また、人間の弱さを示すものとしても捉えられてきた。だから、戦争を経験したことで生じたトラウマは、どうしても大っぴらに語られることがなかったし、当該者自身が語るのにも抵抗があった。

それでも戦争がもたらすトラウマを、文学作品は描いてきた。たとえば、シェイクスピア(William Shakespeare) (1564~1616)は、『ヘンリー4世第一部』(1King Henry IV) (1596~97年)の2

幕3場で具体的に描いている。直情の武将ホットスパ（Hotspur）が戦場から帰ってきてから人柄がすっかり変わってしまったのを、夫人が語っているのだ。ホットスパは、戦場から帰って以来、食欲も、快楽の追求も、安眠も、妻への愛も、生き生きとした表情も無くし、とげとげしい憂鬱に沈んでいる。それだけでなく、浅い眠りのあいだには、戦場のフラッシュバックに悩まされ、大粒の汗を流しながら、戦場の様子を大声で叫んで、傍らの夫人を驚かせている。戦争によるトラウマの典型的な症状が、すでに約420年前に、ベトナム戦争からの帰還兵のPTSD（心的外傷後ストレス障害）の症状だとしても通用するほど、生々しくリアルに語られている。

むしろ近代に入って、国家が戦争を遂行するようになると、戦争を賛美したり、戦場での英雄的行為を喧伝するのは奨励されたが、それに反比例するかたちで、戦争がもたらすトラウマは率直に語りにくい状況が生まれてきた。戦争によるトラウマは、先にも述べたように、負の要素があるから、もともとあまり聞きたい楽しい話ではない。また、戦争トラウマに苦しむ人は戦争の犠牲者だから、戦争が終われば、世間にとっては忘れたい人となる。そのうえ、戦争トラウマを語ることは、厭戦的あるいは反戦的な気分を醸成するものだという空気が世間に生まれてきたからだ。

2. 南北戦争とクレイン

1775年の独立革命によって誕生した米国では、その独立戦争を除けば、アメリカ文学で描かれた最初の大きな戦争は南北戦争（1861～65）だ。南北戦争は、英語ではThe Civil War（*civil warは内戦・内乱を意味する）と呼ばれるように、米国人同士が戦った内戦だった。犠牲者数は北軍が約36万人、南軍が約26万人で、米国が歴史上経験したなかで最大の犠牲者をだした（*第二次世界大戦でも米国人兵士の犠牲者は約32万人）。米国に社会的・文化的にも大きな影響をあたえた。

その南北戦争を描いた作品のなかで最もよく知られている小説は、クレイン（Stephen Crane）（1871～1900）の『赤い武功章』（*The Red Badge of Courage*）（1895年）。

主人公の18歳のヘンリー（Henry Fleming）は、好戦的な愛国熱に浮かされて、母親のつよい反対を押しきって北軍に勇躍して志願する。入隊するまでのロマンチックな気分は、すぐに現実の戦場での行軍と待機のなかで吹きとんだ。

それだけでなく、ヘンリーは最初の本格的な交戦のとき、恐怖から前線から武器を捨てて逃亡したのだ。負傷兵にまぎれて後方に逃げた。逃げるなかで、友軍の兵士が振りまわした歩兵銃がたまたま頭に当たり、失神するほどの流血の傷を負った。

その後、彼は属していた元の連隊に合流できる。その連隊では、頭の流血した傷が名誉の負傷（＝赤い武功章）と誤解されて、彼が前線から無傷で逃亡したことは発覚せずにすんだ。ふたたび戦友として連隊に迎え入れられたのだ。

しかし、ヘンリーは敵前逃亡が死に値する罪であることは分かっている。同時に、戦友を見捨てて前線から逃亡したことへの罪悪感にも苛（さいな）まれてもいる。「正義感と良心が彼をひどく苦しめた」（Shi, 2019: 91）のだ。そうした内面の苦しみから逃れるためもあり、その後の戦闘では目覚ましい勇敢さを示して戦う。敵の標的となる軍旗の旗手が倒れたときには、身代わりとなって旗手の役割を立派に果たす。彼の戦いぶりは、上官や戦友にも称賛される。

それでも「最初の戦闘から自分は逃亡したという亡霊」（Crane, 2008: 102）が、彼につき纏（まと）って離れない。行軍の途中も、仲間の談笑にも加われず独りで過ごし、思わず「焦燥と苦悶の鋭い叫び声」（Crane, 2008: 102）をあげ、戦友を驚かせることもある。この時には、あきらかにヘンリーは戦場で生じたトラウマに苦しんでいる。

しかしこの作品は、ここで終わっていない。「それでもやがて彼はその罪の意識を遠くに追いやる

力と呼び起こした」(Crane, 2008 : 103) のだ。そして「強固な自信 (a store of assurance)」をとり戻し、その結果、自分が「静かな大人の男 (a quiet manhood)」になったと感じ、「自分の魂が生まれ変わった」のを感じる (Crane, 2008 : 103-4)。それを語り手は「彼は戦争という赤い病を排除してしまった。あの暑苦しい悪夢は過去のものとなった」(Crane, 2008 : 104) と断定的に解説する。

ヘンリーは彼を苦しめていた罪悪感をすっかり克服して、「静かな大人の男」に成長したことが語られている。ここでこの作品は終わっている。

つまり、この小説の語りの主眼は、18歳の無垢で無知なロマンチックな少年が、戦場の恐怖にみちた残酷な現実と直面して、一時的には心の傷を負うが、やがてそのトラウマを克服して「大人」に成長する過程にある。戦争という試練をくぐり抜けて大人の男に成長する物語なのだ。典型的な戦争小説である。

だから、作中で描かれるトラウマも、ヘンリーが「大人」になることを際立たせるための材料でしかない。のり越えられた試練の1つにすぎないのだ。戦争トラウマはこの作品のテーマではない。せいぜいのところ、無残な死に方をする兵士たちの姿と同様に、戦場もたらす残酷さを示す材料の1つにすぎない。

それでも、この作品は凡百の戦争小説とは違っている。それは、作者のクレインが醜悪なものを避けずに現実をありのままに描こうとする自然主義の作家だったからだ。クレインは戦場の実態をロマンチックに理想化しない。その残酷で不合理でバカげた実態から目を背けることなく、色彩豊かに印象的に描いている。

当然、ヘンリーがトラウマに苦しむ姿はリアルだし印象ぶかい。しかし、ヘンリーが苦しむトラウマは、この作品のテーマとしては語られていない。読者もそのトラウマを、テーマとして読みとることはない。この作品には、戦争も戦争トラウマも人間に成長をもたらす試練なのだという意味

を読みとってきたのだ。

この作品が書かれた19世紀末のこの時期の米国では、戦争によってトラウマが兵士のあいだに生じることが分かっていた。だが、それを作品のテーマとして描くことはできなかった。それは、当時の米国の読者をふくむ世論が、戦争の負の側面を示す戦争トラウマをテーマとすることを好まなかったからだろう。その世論の見えざる圧力によって、結局、戦争トラウマは人を成長させるものとして肯定的に捉える結末になっている。

3. 第一次世界大戦とシェルショック

南北戦争後、米国は米西戦争(1898年)を除けば、外国との大きな戦争をしてこなかった。だが1917年4月には、ドイツに宣戦布告して第一次世界大戦(1914~18)に参戦し、協商側の1918年11月の勝利に貢献した。

第一次世界大戦は、英語では現在でもThe Great War(あの重要な戦争)と呼ばれる。そのことから分かるように、4年間ヨーロッパを舞台に繰りひろげられたこの戦争は、欧米の社会や文化に決定的な変化や影響をあたえた。たとえばこの戦争で、ロシア帝国、ドイツ帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、オスマン帝国というヨーロッパの4つの帝国が崩壊した。

また、この戦争は国家の総力戦でもあったので、職業軍人だけでなく、いわゆる民間人も数多く参戦した。しかもこの国民を巻きこんだ戦争は4年間も続いた。多くの人びとが戦場でのストレスを経験したのだ。その結果、身体はちよくせつ傷ついていないが、心が傷つき心身の不調を訴える兵士や元兵士が続出した。

世間も、そうした心身の不調を訴える兵士や元兵士を無視できなくなった。そして彼らの症状を、世間はシェルショック(Shell Shock; Shellshock)と呼んだ。というのは、彼らの症状は、近くで炸裂した砲弾(shell)のショック(shock)で脳震盪や脊髄の震盪が起きてそれが原因で生じたと考

えられていたから。現在から見れば、もちろん俗説だ。だが、英国の権威ある医学雑誌『ランセット』(*The Lancet*)も、開戦から約半年後の1915年2月にはシェルショックという単語を使ってその症状を記述している(Binneveld, 1997: 85)。

ここで注意すべきは、シェルショックが症状のたんなる通称で、PTSD(心的外傷後ストレス障害)のような正式な病名ではなかった点だ。結果として、シェルショックに苦しむ人びとは、臆病者、意志薄弱者、社会生活不適応者、作病者とみなされがちだった(Herman, 1997: 21)。世間の否定的な目に曝(さら)されがちだったのだ。

しかし、繊細な感受性をもっている作家は、戦争によるトラウマであるシェルショックに対して真摯な関心を示し、それを作品で描いている。たとえば、オニール(Eugene O'Neill)(1888~1953)は、1918年にはすでに一幕劇の『シェルショック』(*Shell Shock*)を書いている。そこでは、シェルショックに罹って米国に帰還していたアーノルド(Arnold)少佐が、軍医のウェイン(Wayne)と出会って、ウェインの適切なアドバイスでシェルショックを克服する過程が描かれている(O'Neill, 1988: 657-72)。

この劇で明らかになるのは、米国の兵士のなかには戦争によるトラウマに苦しむ者がいて、その治療にあたる専門の軍医がいたこと。また、「(どんな猛者でも)たいてい突然シェルショックになる」(O'Neill, 1988: 661)と軍医が語っているように、すべての兵士には戦争トラウマになる可能性があることが専門家には分かっていたこと。さらに、その可能性をふくめて戦争トラウマそのものをも、少佐本人も世間もきちんと理解していなかったことが明らかになる。

この劇は、軍医の適切なアドバイスで、少佐がトラウマをすぐに克服してハッピーエンドで終わる。ただしこのハッピーエンドは、少佐の自己犠牲をも厭わない勇敢な行為がトラウマのちよくせつの原因だったのを考慮しての、作者オニールと観客の願望を反映した希望的結末だったと思われる。

というの、現実の戦争トラウマはそんなに簡単に治癒するものではなかったから。たとえば、1919年には米国政府は、シェルショックと類似の症状を示す帰還兵のために300床の専門病院を開設し、1921年にも、同様の施設をさらに建設している(*NYT*, Aug. 21, 1921)からだ。

たしかに、この『シェルショック』は現実の深刻な実情を描ききれていない。しかし、戦争トラウマの1つの症状をくわしく描いていて、それをテーマにした米国で最初の文学作品だったと思われる。ところが上演はされなかったようだ。

さて、その戦争トラウマが、第一次世界大戦後の米国社会でどのように捉えられていたかを知るのに、1921年8月31日のニューヨークタイムズの興味ぶかい記事がある。その記事を訳すとつぎのようになる。

シェルショックの少佐、ホテルで自殺を試みる
ジョセフ・A・ヤングは頭を銃弾で撃ちぬいたが、一命をとり留めていて、逮捕された。

フィラデルフィアから来たジョセフ・アームストロング・ヤングと妻と友人夫妻が、昨日、コロンバス街の角の西72番通り112にあるハーグレイブホテルのスイートルームから退室していたときに、ヤングは「ちょっとすみません」と言って、脇に寄って、それから38口径の回転式拳銃で頭を撃った。(中略)彼は拳銃を隠しもつことを禁じる州法違反で逮捕された。容態は重症だということだ。

36歳のヤングは、西127通り610に住むクレメント・C・ヤング医師の息子で、兵卒として入隊してカナダ軍とともにこの世界大戦を戦い、負傷して2度シェルショックに罹った後、砲兵隊の少佐として退役した。

夫妻は、フィラデルフィアに住むH.M. ブラウン夫妻とともに、月曜日にそのホテルの2階のスイートルームに部屋をとった。夫は、最近、シェルショックによる不調をずっ

と訴えていたと、妻は語った。二組の夫婦は月曜日の夜、芝居を楽しみ、昨日の朝には、ヤング氏は気分良好な姿を現した。

(中略) プロドスキー医師は、弾丸が頭を貫通して右のこめかみから抜けているのに、ヤング氏が命をとり留めているのは奇跡だと言っている。警察によると、ヤング氏は発砲する少し前に、母親の訪問を受けていたということだ。(NYT, Aug. 31, 1921)

この抄訳からは、ヤング夫妻は友人夫妻とともにニューヨークで夜に芝居を楽しみ、翌日、気分よく朝を迎え、昼ごろチェックアウトするとき、ヤング氏が自殺を試みたのが分かる。スイートに一泊して観劇を楽しむという少し余裕のある暮らしだが、ヤング氏はふつうの生活を送っていたのが分かる。

そのうえ、まず、戦争トラウマの最悪の症状は、とつぜん唐突に現出することが分かる。唐突ゆえに理解できないから、謎めいた行為に見える。つぎに、そのトラウマの最悪の結果は、休戦から約2年9カ月後になっても、とつぜん現れることが分かる。そのトラウマに苦しむ者は、表面的には「ふつう」の生活をかなり長い間にわたって送ることができていても、とつぜん唐突に最悪の結果を招くことがあるのだ。

さらにこの記事からは、1921年8月の段階では、戦争トラウマに苦しむ帰還兵は、とつぜん唐突に自殺を試みることがあるという、ある一定の共通理解のようなものが存在していたことが分かる。だからこそ、この記事の見出しを、大文字のブロック体で「シェルショックの少佐、ホテルで自殺を試みる」とつけているのだ。ところが、ハーマンが心的トラウマは「定期的に忘れられてきた」(Herman, 1997: 7) と言っているように、この共通理解は長くつづくことはなかった。この事実が、帰還兵士の戦争トラウマを描いた文学作品の理解をむずかしくしている大きな要因となっている。

4. 第一次世界大戦とフィッツジェラルド

フィッツジェラルド(1896~1940)は、名作『偉大なるギャッツビー』(*The Great Gatsby*) (1925年)の作者として知られている。彼は第一次世界大戦に自ら参戦しようとして、1917年10月には名門プリンストン大学を中退して軍隊に志願入隊した。しかし1918年11月の休戦の成立によって、歩兵連隊に将校として配属されていたが、戦場に派遣されることはなかった。1919年2月には除隊し、直後にニューヨークに直行して、作家修業を本格的に始めた。

そういう経歴をもつ作家だから、フィッツジェラルドはシェルショック(=戦争トラウマ)にも関心をもっていた。1919年には、すでに短編「バーニス断髪す」(“Bernice Bobs Her Hair”)を書いて、シェルショックを、流行の言葉として気軽に使っている若い娘を批判的に描いている。

そのフィッツジェラルドが、中編「メイ・デー」(“May Day”)を1920年の初頭に書き、7月に出版した(Tuttleton, 1982: 181)。この作品について、1922年にはフィッツジェラルド自身が、1919年の春にニューヨークで起こった3つの出来事を、その春の「世間の興奮状態」を背景にして描いた物語だと書いている(Fitzgerald, 2002: 6)。

作中で5月1日のこととして描かれている3つの出来事とは、イェール大学同窓会主催の豪華なパーティとその後の乱痴気騒ぎと、暴徒となった帰還兵士たちが左翼系の新聞社を襲撃した事件と、イェール大学卒業生で帰還兵士のゴードン(Gordon Sterrett)の孤独な自殺事件だ。ちなみに、この3つにはすべてモデルとなる出来事がフィッツジェラルドの身近で起こっていたことが分かっている(Turnbull, 2004: 101-03)。

こうした理由から、この「メイ・デー」は、1919年5月1日(=メイ・デー)のニューヨークの社会と風俗を、醜悪な面もふくめてリアリティックに描いた作品とみなされてきた。

さて、この作品は、そのメイ・デーの日の3つの出来事を11の章に分けて描いている。伝統的な価値観が崩壊した第一次世界大戦後には、アバンギャルドと呼ばれる新しい芸術運動が生まれてきた。当時23歳のフィッツジェラルドもその大きな波の影響を受けた。つまり、プロローグと11の章からなる、この作品においても、物語は断片化されていて、11に分けられている。しかもその11の章のそれぞれは、緊密にちよくせつ連携しているとはいいがたいのだ。この作品の主人公と思われる帰還兵士のゴードンも、11の章の内6つの章に登場しているにすぎない。（*念のためにつけ加えておくと、次いで多く登場する人物は、副主人公と思われる帰還兵士のローズ（Gus Rose）で、5つの章に登場する。）

たしかにゴードンの登場の章は多いとはいえないが、しかしこの作品は、ゴードンのビルトモアホテルへの登場で始まり、ゴードンの安宿での拳銃自殺で終わっている。しかもゴードンの唐突な拳銃自殺はインパクトがつよくて謎めいている。だから「なぜ自殺したのかという」ゴードンの自殺の謎が、この作品の「研究の主要な論点とされてきた」（上西、1996：21）のだ。この点からも、ゴードンは主人公の役割を果たしている。

24歳のゴードンは、名門イェール大学を卒業後に軍隊に志願入隊して、1919年2月に帰国したばかりの元兵士として登場する。大学在学中は、絵画に才能を発揮するような芸術家肌の男で、ベスト・ドレッサーとも目され、女性にも人気の学生だった。エリート大学の前途洋々たる好青年だったのだ。

ところが、第一次世界大戦から帰国してからは、その前途は暗転する。復員してから約1カ月後の3月には、故郷からニューヨークにでてきて会社に就職するが、4月には、その会社を誅首される。それも当然だった。なぜならニューヨークでは、連夜、パーティと酒と女の日々だったから。

5月1日の朝には、学友で友人のディーン（Philip Dean）が見立てているように、ゴードン

は「経済的にも道徳的にも破産状態だった」（Fitzgerald, 1989b：102）。その時のゴードンは、頭は割れんばかりに痛んでいて、姿は哀れを誘うほどのひどい有様で、疲れきっている。両目は血走り無意味に空転している。手も震えている。「不安と貧困と眠られぬ夜」に苦しめられていて、死にたいとも、ディーンに告白している（Fitzgerald, 1989b：102）。

実は、帰国する前からその前兆はあった。ゴードン自身の言葉を使えば、「この4カ月間、わたしの内部では何かがプツンと切れつづけている。（中略）本当にだんだんと気が狂い始めているんだ。」（Fitzgerald, 1989b：118）という状態だった。退役する前から、彼の精神の崩壊はすでに始まっていたのだ。

ゴードンのこの状況を考えると、ゴードンは戦場でのストレスからトラウマを発症していたと判断できる。戦争トラウマに苦しんでいたから、その苦しみから逃れるために、酒や女に溺れていたのだ。その結果「経済的にも道徳的にも破産状態」になっているのだ。

しかし戦場を知らない周囲の人間は、戦場で心が傷ついたゴードンの苦しみを理解しない、というか、できない。帰還後のゴードンは意志薄弱な人生の落後者とみなされている。友人のディーンですら、少額の金を貸してはくれたが、現実を直視して働くことを助言するのみだ。そのうえゴードンは、関わりのあった貧民街の女からは多額の金を要求されている。

そんななかで、ゴードンは安宿でこめかみを撃ちぬいて拳銃自殺する。ここで、この小説は終わる。しかも周囲の人間は、このゴードンの自殺を、あまり気にもとめないか、せいぜいのところ、たんに意志薄弱な男が人生に落後した果ての自殺だったと理解したに違いない。そう予測させる終わり方なのだ。

この終わり方に、この作品が描きたかったことがある。すなわち、戦場で心が傷ついた兵士のトラウマは、戦場にでていない世間の人びとには理

解されないこと。また、復員後の振舞いからだけ判断されて、トラウマに苦しむ元兵士は意志薄弱な人生の落後者とみなされること。そして、たとえ自殺しても、そのトラウマが原因の自殺とはみなされないことを伝えようとしている。

しかし作品のそれらの意図はじゅうぶんには伝わっていない。たとえば、「ゴードンをもって生まれた弱さの犠牲者にすぎないのであって、彼の貧困は彼の墮落の原因ではなく、結果である」(Sklar, 1967: 88) とか、「ゴードンの崩壊と自殺は、実利的で凡庸な米国や金を巻きあげようとする女が原因というよりも、むしろ道徳的な意思をみずから麻痺させた結果である」(Tuttleton, 1982: 184) というような意見がある。作品全体についても、この作品に、社会主義の正義に憧れる気持ちと、資本主義が支えている上流階級の洗練された美意識に憧れる気持ちとに引き裂かれているアンビバレントな作家の姿を読みとる人(Gervais, 1985: 170-73) もいる。また、世界が拡散している歴史の転換点で、その現実をどう認識し、どう表現するかに苦悩している主人公を描いた作品だと解釈する人(上西, 1996: 21-22) もいる。

わたしが知るかぎり、この「メイ・デー」を戦争トラウマとの関連で解釈した批評を目にしたことはない。その1つの原因は、ハーマンがいうように、戦争トラウマは「定期的に忘れられている」ことによるのだろう。

しかし「メイ・デー」を素直に読めば、主人公のゴードンは、戦場トラウマに苦しんでいたが、その苦悩を誰にも理解されずに孤立して死んだ帰還兵士だったことが読みとれる。そこには、作家フィッツジェラルドのそうした世間の無関心への憤りと、戦争トラウマに苦しむ帰還兵士への同情的な理解がある。とくに世間の無関心に対する憤りは、ゴードンの孤独な惨めな死とは対照的な、国内にいた裕福な恵まれたイェール大学の同窓生たちの有名レストランのデルモナコを貸切つての豪華なパーティと、その後の朝までつづく街中で

の乱痴気騒ぎを描くことで表されている。

5. 第二次世界大戦とサリンジャー

第二次世界大戦(1939~45)には、米国は武器輸出などで実質的には参戦していたが、正式には少し遅れて1941年12月に参戦し、連合国側の勝利に貢献した。米国は名実ともに資本主義陣営のリーダーとなった。

この戦争に、作家サリンジャー(Jerome David Salinger)(1919-2010)は兵士として加わった。サリンジャーの父はユダヤ人で、母はアイオワ州生まれのドイツ系であった(Slawenski, 2010: 6)。勤勉だったこともあり、父親は実業界で成功し、一家は1932年には、セントラルパークに接した最高級住宅地の高級アパートメントに使用人つきで住むようになった。

サリンジャー本人は、学業はあまり熱心ではなく、ニューヨークの私立高校は放校になり、田舎の軍隊式のヴァレーフォージ軍学校を卒業した。その後、軍学校近くの大学に入学するが中退して、ニューヨークに戻り、作家になるための修業を始めた。

23歳になった1942年4月27日に軍隊に入隊し、1944年1月29日には、ヨーロッパ侵攻作戦のために英国のリバプールに派遣された。第4歩兵師団の諜報部隊の士官である2等軍曹となっていた(Slawenski, 2010: 79)。1944年6月6日のノルマンディー上陸作戦に参加したのを皮切りに、ヒュルトゲンの森、バルジの戦いなどおもな激戦をすべて経験した運の悪い兵士だった。だが、幸運にも生き残った。しかも驚くべきことには、その間も短編小説を書きつづけ雑誌に投稿をつづけていた。

しかし代償も支払わなければならなかった。5月の休戦から数週間後の7月には、戦争のストレスから精神を病んでその治療のために、ニュルンベルクの病院に入院し、鉄格子のはまった病室に2週間入院している(Shields and Salerno, 2013:

169-71). そして同年の11月22日には、軍隊をいったん名誉除隊して、それまでの任務であった諜報部員として国防省と民間人契約を結び、1946年4月30日までその任務について (Shields and Salerno, 2013 : 172, 178).

一方で、その間にドイツ人女性シルヴィア (Sylvia) と出会い恋に落ちて、フランス人女性と偽装して、1945年10月18日には結婚した (Shields and Salerno, 2013 : 177). (*当時、占領地のドイツ人女性と米国人兵士との結婚は禁止されていた。)二人は1946年5月10日に帰国し、両親と同居したが、6月上旬にはシルヴィアは一人でドイツにすぐに帰国した。結婚は破綻したのだ。

サリンジャーは現在では、2017年の時点で全世界で6,500万部売れている『ライ麦畑でつかまえて』(*The Catcher in the Rye*) (1951年)の作者として知られている。しかし一方で、すぐれた短編作家でもある。自らが選りすぐった9つの短編を『ナイン・ストーリーズ』(*Nine Stories*) (1953年)のタイトルのもとに出版している。その9つの短編のなかでも「バナナフィッシュに最適の日」("A Perfect Day for Bananafish") (1948年)は、最もよく知られている作品だ。

この作品では、フロリダのホテルに2日前から泊まっているシーモア (Seymour Glass) とミュリエル (Muriel) 夫妻の数時間の振舞いが描かれている。前半では、ホテルに一人でいるミュリエルが語られる。午後2時半だというのに、ミュリエルは起きて間もない化粧着だけの姿で、ニューヨークにいる実家の母と電話をしている。その電話のなかで、母と娘の性格だけでなく、娘婿のシーモアのこと、シーモアに対するミュリエルの両親の考え方も明らかになる。

後半では、シーモアが語られる。シーモアは海岸で一人で日光浴をしているが、そこに前日と同じように、シビル (Sybil Carpenter) という女の子が遊びにやってくる。二人はシャロン (Sharon) という女の子や『ちびくろサンボ』

(*Little Black Sambo*) の話をする。それから海に入って、腹ばいになったシビルを浮き輪に乗せて押しやりながら、シーモアはバナナフィッシュの話をしてシビルに話す。バナナフィッシュは、海中のバナナ穴に住んでいて、バナナ穴にあるバナナを食べて大きくなりすぎてバナナ穴からでられなくなり、最後はバナナ熱に罹って死ぬのだ。

もちろんバナナフィッシュは、山椒魚とは違って、シーモアが創造した架空の生き物だ。しかし波が来て、シビルの顔が海水に浸かったとき、シビルはバナナフィッシュが一匹見えたと言う。そこでシーモアが、バナナを唾(くわ)えていたかを訊ねたら、シーモアは6本唾えていたと答える。その答えを聞いて、シーモアはシビルの足の土踏まずにキスをして、シビルがもっと遊びたがっているにもかかわらず、シビルとの遊びをやめる。するとすぐにシビルは、母がいるホテルの方に走りさる。

シーモアもきちんとローブを着てホテルに戻る。ホテルのエレベーターでは、たまたま乗りあわせた女性に、「ぼくの足を見えていますね」(Salinger, 1991a : 17) と言って、女性を怒らせる。それから5階の自室に戻る。部屋では、ミュリエルがツインベッドの片方で眠りこんでいる。

その姿を見てから、シーモアはトランクから拳銃を取りだし弾倉を点検し、空いている方のベッドの方に歩いてゆく。「(もう一度) その女 (the girl) を見て、拳銃の狙いを定めて、自分の右のこめかみを弾丸で撃ちぬいた。」(Salinger, 1991a : 18) のだった。ここで、この短編は終わっている。

この作品の語り手は、外部からの観察者に徹している。登場人物の内面を語ることも、内面を付度(そんたく)することもない。この自殺の場面でも、シーモアの振舞いだけを語っている。だから、海岸から戻ってきた直後のシーモアの拳銃自殺は、読者には唐突でよく分からない。謎なのだ。しかもこのシーモアの自殺は、この作品の中心に位置する謎である (Wenke, 1991 : 37)。そして

この謎に直面した読者は、その謎についていろいろ思いめぐらすことになるから、この謎はこの作品の大きな魅力にもなっている。

その結果、この作品では、シーモアの死の謎が中心に論じられてきた。その解釈を大別すれば、3つになる。1つ目は、シーモアは「戦争によって感情面に損傷を受けたので、ふつうの社会でうまく生きてゆけなくなった」(Alexander, 1999: 126)に見られるように、戦争トラウマによって自殺したという解釈だ。

2つ目は、精神世界を重んじ繊細な神経をもつ自意識過剰気味なシーモアが、虚飾にみちた物質的なまわりの世界に絶望して自殺したという解釈。たとえば、ヴィーガントはシーモアの豊かすぎる感情が社会での不適応をもたらし、自殺にいたった(Wiegant, 1963: 125)と考える。また、利沢は、シーモアが心に抱えている理想のミュリエル像と現実のミュリエルとの「落差」に、自殺の1つの原因があった(利沢, 1978: 208)とみなしている。

3つ目は、1つ目と2つ目を混ぜあわせたものだ。たとえば、過剰な感受性をもったシーモアが、軍の病院を退院してから、物質的で粗野な世の中で、鈍感な妻との生活をつづけられなくなった(Gwynn and Blotner, 1958: 19)という解釈がある。

これら3つの解釈は、ほぼすべての解釈の可能性を網羅している。この作品を社会や時代から孤立した一個の芸術作品として読めば、それなりに妥当性をもっている。どれをも完全に否定はできない。

しかしこの作品の書かれた背景を考慮すれば、おのずと解釈の幅は狭まる。サリンジャー軍曹は、休戦直後に戦場のストレスから精神を病んで2週間病院に入院し、ふたたび原隊に復帰している。そういう経験もあって、サリンジャーは作家としても、戦争トラウマにつよい関心をもっていた。

たとえば、別の短編「エズメに」(“For Esmé”)

(1950年)では、休戦から数週間後に、戦争によって精神を病み2週間の入院から原隊に戻ってきたX軍曹の姿をくわしく描いている。その軍曹は、小説の一文の意味をも読みとれない、指が震えている、舌で押しただけで歯ぐきから出血する、全身の浮遊感覚に苦しんでいる、身体が不潔なのが気にならなくなっている、自分宛てに届いている手紙に関心を失っている、人生は地獄であるという言葉につよい感銘を受けている、書いた字が判読できない、薄暗い室内を好んでいる、顔面が痙攣している、激情がとつぜん爆発する、とつぜん嘔吐する(Salinger, 1991b: 103-110)などの症状を示している。その症状は、現在なら重症のPTSDと診断されると思われる深刻なものだ。しかし1945年の米国軍では、神経症は治癒したとして原隊に復帰している。

ところで、作中のシーモアは、戦争のストレスから精神を病んで軍の病院に入院していたし、復員した今も、運転している車を樹にぶつけたり、絵や窓を壊したり、祖母に残酷なことを言ったりしている。そうした異常な振舞いに、ミュリエルの両親は娘の身の危険すら案じている。さらに、ミュリエルの母は、シーモアを病院から退院させたのは陸軍の「完全な犯罪」(Salinger, 1991a: 6)だという医者証言を娘に話している。

とすれば作家サリンジャーが、シーモアがトラウマからまだ回復していないことを伝えようとしているのは確かだ。戦争トラウマに苦しむ患者は、実際には完全に治っていないのに、病院を退院したのだから「正常に」戻った者として世の中にだされる。世間の人びとも「正常に」戻った者として対応する。そこには齟齬(そご)が生じる。その齟齬に、一番苦しむのは(元)患者だ。しかも、その苦しみを世間の人びとは理解しようとしなことが、ますます(元)患者を苦しめる。シーモアのそのあたりの苦しみを、読者は、ミュリエルと母との会話から間接的に察知できる。

シーモアが戦争トラウマから回復できていないのであれば、シーモアの拳銃による唐突な自殺も

納得できる。第3章で引用した「シェルショックの少佐、ホテルで自殺を試みる」の新聞記事からもあきらかなように、戦争トラウマに苦しむ人間は、唐突に謎めいた自殺をはかることがあるからだ。1921年に起きたヤング少佐のこの事件は、サリンジャーの創作にインスピレーションをあたえたのではないかと思えるほど、その構図は似ている。

要約すれば、「バナナフィッシュに最適の日」は、まず、戦争トラウマに苦しむ元兵士は、戦場から生還しても、唐突に自殺を試みることもあるのを伝えようとしている。シーモアの自殺の謎を伝えようとしているのではない。つぎに、戦争が終わって数年がたち平和な世の中になっても、戦争に由来するそういう悲劇が厳然として存在することを伝えようとしている。そして世間は、トラウマに苦しむ元兵士を、ミュリエルの両親のように、排除しようとするか、せいぜいのところミュリエルのように、共感的に理解しようとせず、無関心で、ただ排除はしていないだけなのを伝えている。その結果、戦争トラウマに苦しんだ元兵士の死を、世間はたんに謎めいた死としてのみ受け入れがちなことも伝えている。

6. ベトナム戦争とオブライエン

第二次世界大戦以降、米国は朝鮮戦争（1950～53）やイラク戦争（2003～11）などいろいろな戦争を戦ってきた。そのなかでも、米国の社会や文化に最も大きな影響をあたえたのはベトナム戦争（1964～75）だ。

ベトナム戦争当時の米国には徴兵制度があり（*1973年には制度は廃止された）、若者は否応もなく徴兵され、その多くがベトナムの戦場へ送られた。約10年におよぶ戦争で、戦死した兵士約58,000人、負傷した兵士約303,600人、心に深い傷を負った多数の兵士という犠牲を米国は払った。（*戦場となったベトナムでは、その数十倍以上のベトナム人兵士や民間人の犠牲者をだし

た。正確な数字が不明なほど多数だった。）

さて、東南アジアの見知らぬ小国の戦場に送りこまれた米国の若者のほとんどは、この戦争に大義を見いだすことができなかった。また、米国本土にいた人のなかにも、この戦争に大義を見いだせないだけでなく、その犠牲にみあう意義や意味を見いだせない人びとがいた。その結果、ベトナムで戦った兵士は、生きのびて帰還しても、これまでの帰還兵士と違って、国家のために戦った英雄として、全員の帰還兵士が故郷の人びとに祝福されて迎えられたわけではなかった。反戦デモに迎えられないことさえあった。こうした状況は、ベトナムで戦った兵士を苦しめただけでなく、米国社会全体に複雑な軋轢（あつれき）や苦悩を生じさせた。

そんな国内状況のなかで、帰還兵士の社会への復帰のむずかしさが注目されるようになった。とりわけ戦場で心が傷ついた兵士は、孤立して就職できなかつたり、家族生活が営めなかつたり、薬物やアルコールの中毒になつたり、奇行や反社会的行為をおこなつたり、最悪の場合は、罪を犯したり、自殺したりした。

そこで、そうしたトラウマに苦しむ帰還兵士を救うために、臨床医や帰還兵士が中心になって運動が起きて、彼らはPTSDという病気に苦しむ患者として公式に認められた。この1980年の米国精神医学会の決定は画期的なものだった。誰もが罹る病気だと認められることで、いわれのない偏見が軽減されることにもなったし、世間もPTSDの存在を広く認知するようにもなった。戦争のトラウマに苦しむ帰還兵士の見える化が進んだのだ。そういう影響も、ベトナム戦争は結果的に社会にあたえた。

このベトナム戦争を描いた作家のなかで、最もよく知られているのが、オブライエン（Tim O'Brien）（1946～）。そして「米国におけるベトナム戦争についての最も重要な書き手」（Heberle, 2001: 1）の地位を獲得する契機になったのは、ここで取りあげる5作目の長編『失踪』

(*In the Lake of the Woods*) (1994年)だ。

この作品は、『タイム』(*Time*)誌による「1994年度のベスト小説」に選ばれ、1995年にはフェニモア・クーパー賞をも受賞している。さらに1996年にはテレビドラマ化もされて、オブライエンの作品のなかで商業的にも最も成功した作品となった(Herzog, 1997: 145)。

オブライエンは、徴兵逃れでカナダへの逃亡を考えたこともある(O'Brien, 2009: 37-58; Smith, 2005: 5)ようだが、マカレスター大学を優等で卒業した1968年、徴兵で陸軍に上等兵(PFC)として入隊した。1969年にベトナムに派遣され、同年、ソンミ(Son My)村のミライ(My Lai)地区にも滞在した。1970年に軍曹で退役後、大学院に在籍しながら執筆活動を始め、1979年には、バーリン(Berlin)一等兵を語り手とする『カチアートを追跡して』(*Going after Cacciato*) (1978年)で全米図書賞を受賞する。

オブライエンがソンミ村ミライを訪れたのは、アメリカ兵が村人約500人(*米軍は347人以上としている)を虐殺した1968年3月16日から約1年後だった。その時は、まだ虐殺の事実はまだ明らかになっていなかったし、オブライエンも知らなかった(Smith, 2005: 6)。しかし1969年末ごろから、ハーシュ(Seymour Hersh)など記者たちの努力によって、隠蔽されていたソンミ村の虐殺が、米国のメディアにセンセーショナルな写真つきでつぎつぎと報じられるようになった。

そのむごたらしい大虐殺を知った世界の人びとは驚愕し怒った。そのなかの一人にオブライエンもいた。もちろん、同じアメリカ兵として、また、アメリカ兵としてソンミ村に滞在した者として、ソンミ村の虐殺は、オブライエンにとって特別な意味をもった。だからこの『失踪』でも、ソンミ村の虐殺は大きな影を落としている。むしろ、この小説の核心には、ソンミ村の虐殺がある。

しかしこの作品では、おもに描かれているのは、1986年9月から10月のミネソタ州にある貸別荘とその周辺。その貸別荘は、ミネソタとカナダの

国境にある実在の巨大な湖レイクオブウッズ(The Lake of Woods)の湖畔にある。(※この作品の原題の*In the Lake of Woods*は、この湖の名に由来している。)しかもその別荘は、管理人でもあるオーナーの家にも車でゆかねばならないほど孤立した一軒家だ。

この人里離れた別荘に、1986年9月11日、41歳のジョン(John Wade)と38歳の妻キャシー(Kathy)がやってくる。9月9日の上院議員の予備選挙でジョンが大敗したので、心の傷や疲れをいやすためだった。

ところがジョンの証言によれば、9月19日の朝には、妻のキャシーが失踪していた。そしてジョンは、妻の失踪の原因について心当たりはないとも証言する。ここから、この小説は始まる。キャシーの失踪がこの作品の「中心的な謎」(Herzog, 2000: 893)となっているのだ。

だから、この作品は謎解きのミステリーのように見える。だが、それほど単純ではない。たとえば、キャシーの失踪についておもに語っていたジョン自身も、最後にはレイクオブウッズ湖で失踪して行方不明になる。行方不明になった本人が妻の失踪について語ることはできない。ジョンの背後には、ジョンを創造したこの作品の語り手がいるのだ。しかも、その「語り手の私」は、作中に顔をだし、この『失踪』がキャシーとジョンの失踪に関心をもったから生まれた作品であることを説明する。

さらに「語り手の私」は、夫婦が失踪してから約3年後の1989年12月に関係者にインタビューを始め1994年3月に終えていること、その間に収集した証言や情報や資料から、ジョンやキャシーなどの登場人物の人物像を創造したことも語っている。そうしたことを隠さないだけでなく、「語り手の私」として、全36章からなるこの作品のなかで、わざわざ7つの「証拠」や8つの「仮説」の章をたて、さらに136個もの「注釈」を加えて、自分が発見した情報や自分の考えを、読者にちよくせつ伝えている。

つまり「語り手の私」は、フィクションの『失踪』を語ろうとしながら、歴史上の人物をできるだけ事実にそって描こうとするノンフィクションの歴史書のような手法を取っているのだ。

たとえば、この作品の中心な謎であるキャシーの失踪についても、「語り手の私」は6つの可能性を「仮説」として示している。その仮説は、要約すると(1)夫のもとから一人で逃亡した、(2)恋人の手引きで逃亡した、(3)湖での偶発的な事故で死亡した、(4)湖で自殺して行方不明になった、(5)夫とともに新天地で新しい人生を送るために、夫と共謀して失踪した、(6)夫に殺されて、死体はボートとともに湖底に沈められた、の6つである。

もちろん「語り手の私」は、そのどれが事実に近いと考えているかについて、語ることはない。読者が選ぶことを求めている。従来の伝統的な小説の技法とは違っているのだ。だからこの作品を、ポストモダンな小説と呼ぶ人 (Farrell, 2011 : 128 ; Heberle, 2001 : 223-24 ; Herzog, 2000 : 895 ; Melley, 2003 : 114) もいるし、メタフィクションと呼ぶ人 (Worthington, 2009 : 123) もいる。

この時代設定と場面設定からは、この小説はソンミ村の虐殺との関連はないように見える。しかし実は、ジョンは、18年間も隠しつづけていたが、カリー (William Calley) 中尉の部隊の一員で、ソンミ村の虐殺に加わっていたのだ。この事実が、予備選挙の最中に、新聞で暴露された。そのために、それまで圧倒的に有利に選挙戦を進めていたが、大敗を帰した。人間としての信用も信頼も失った。政治家として13年間にわたって築いてきたキャリアも一気に失った。

同時に、妻は、こんな重大な、しかも醜悪な事実を18年間も隠してきた夫を、信頼できなくなった。結婚も破綻の危機にひんしている。つまり、ジョンがソンミ村の虐殺に関わっていたことが、このレイクオブウッズ湖の湖畔で起きたキャシーとジョンの失踪の根底にある。

では、そもそもソンミ村の虐殺は、ジョンにど

んな影響をあたえたのか。ジョンは大学も卒業し、復員後は弁護士になるような、判断力もある優秀な男だった。だからこそ逆に、ソンミ村の虐殺に部隊の一員として、たとえ消極的であったとしても、加わったことは、心に大きな傷となるトラウマを残した。

その直後から、ジョンは「戦争のなかで自分を忘れよう」として「異常に危険なこと」や「考えられないような行動」(O'Brien, 1994 : 271) をあえて行うようになる。その結果、重傷をふくむ2度の負傷をする。「その負傷の痛みこそが、ジョンの体と心がバラバラになるのを防いでいる全てだった」(O'Brien, 1994 : 271) と、作中の「語り手の私」は語っている。ソンミ村の経験は、ジョンの体と心がバラバラになるようなトラウマを残したのだ。

そんな圧倒的な苦しみのなかで、ジョンはあと1年間ベトナムの戦場に残ることを志願する。この決心は、ジョンの帰りを待ちわびている恋人キャシーとの再会が1年間延びるだけでなく、戦死をふくむ戦傷の可能性が1年間延びることをも意味する。ジョン以外の誰にも理解できない決断だった。

しかしジョン自身も、帰国を1年間延ばせば苦悩が解消すると考えていたわけではない。とりあえず、命の危険にさらされる戦場にさらに身を置くことで自分を忘れて、苦悩を軽減しようと考えていたのかもしれない。あるいは、国家に命をかけて奉仕することで、犯した罪のある種の「禊(みそぎ)」(Young, 2006 : 132 ; Herbele, 2001 : 253) や「自己処罰」(Herbele, 2001 : 225) をしようとしていたのかもしれない。

しかし偶然という運命が、ジョンに働く。ベトナムでの2年目の任期が切れる2カ月前に負傷したことで、ジョンは前線から離れて、大隊本部のデスクワークの仕事につくことになった。そのことで、ジョンはベトナムでの自分の経歴を改竄(ざん)するチャンスを与えた。チャーリー中隊に属していたのに、別のアルファ中隊に属していたかのよ

うに書きかえたのだ。書類上は、ソンミ村の虐殺と無関係な人間となった。しかし自分の意識からその虐殺を「削除」できた (Shaalán, 2020 : 117-18) わけではない。

公文書を書きかえることで、虐殺とある種の折り合いを無理やりつけたのだ。改竄が完了してから1週間後、ジョンは米国に帰還した。

公文書を書きかえて、自分の経歴を変えようとする発想そのものが正常とは言いがたいが、1969年11月に除隊してからのジョンの振舞いも異常なものだった。ジョンは帰国の日時をキャシーに連絡せず、キャシーを2日間にわたって監視する。あきらかに異常な行動だ。そのうえ、キャシーを尾行しているあいだも「まだ滑りつづけている」と感じ、その日の夜も「一晩中くらくらす遊離感覚がまとわりついている」のを感じ、また「夜明け近くの時点で、気がつく、目覚めて床にうずくまって、暗闇と対話していた」(O'Brien, 1994 : 42)のだ。翌日、キャシーをバス停で見張っているあいだも、「両目が痛んだし、心も、あらゆるところが痛んでいる」(O'Brien, 1994 : 43)と感じている。復員直後には、ジョンは深刻な戦争トラウマの症状を示している。

約半年後にキャシーと結婚してからも、キャシーは夫のジョンは精神分析医との面談が必要だと考えていたり (O'Brien, 1994 : 75)、奇声をあげて悪夢にうなされるジョンに別人格を見いだして恐怖を感じている (O'Brien, 1994 : 76)。戦争によるトラウマが、身体の痛みや異常な感覚や異常な行動になって現れているのだ。

それでもジョンは、1973年には司法試験に合格し弁護士になり、1976年にはミネソタ州議会議員に当選し、1982年には副知事になる。家庭人としての幸せは犠牲にしたところはあったが、政治家としてのキャリアを順調にアップさせていた。

ところが、先にも述べたように、公文書の改竄という罪を犯してまで18年間守ってきた人生の汚点が、新聞によって暴露されたのだ。ジョンの

これまでの人生は一気に崩壊した。ふたたび心に大きな傷を負った。それで、これまで何とか折り合いをつづけてきた戦争トラウマが、さらに悪化し顕在化した。なぜなら、トラウマとなる経験を以前にしていると、その後のトラウマとなる経験では、さらに一層ひどい症状を示す (斎藤, 2006 : 35) からだ。

実際、別荘でのジョンは、寝汗をかき、微熱がでて、頭が変になった気がしている (O'Brien, 1994 : 47)。過酷な接近戦の激しいフラッシュバックに襲われ、夜中に突撃の叫び声をあげて妻を怖がらせている (O'Brien, 1994 : 47)。

また、キャシーが失踪した夜中には「キル・ジーザス」という呪いの言葉を吐きながら、大きなヤカンで湯を沸かして、その熱湯をいろんな観葉植物にかけている (O'Brien, 1994 : 133)。あるいは、夜中に気がつく、裸になって湖に腰まで浸かっていたり、つぎに気がつく、裸で震えながら棧橋に座っていたり (O'Brien, 1994 : 134) する。記憶までもが飛んでいるのだ。キャシーが失踪した夜には、ジョンの戦争トラウマは極限的な症状を示している。それは確かだ。

とすれば、「語り手の私」はキャシーの失踪の原因について6つの可能性を提示しているが、ふつうに考えれば、(6)のジョンがキャシーを殺害してボートと一緒に湖底に沈めたのだらうと推測できる。戦争トラウマの症状が充進したなかで、忘我状態で妻を殺害して隠蔽したと考えられる。多くの研究者 (Cohen, 2007 : 232 ; Farrell, 2011 : 131-32 ; Franklin, 1994 : 42-43 ; Piwinski, 2000 : 201) も、そう考えている。そのうえ、ジョン自身も失踪している。

これらのことを考えれば、戦争トラウマに苦しんでいたアフガニスタンからの帰還兵士3人が、約1カ月間にあいついで妻を殺害したうえで、内2人は自分も自殺するという事件 (『朝日新聞』2002年7月27日)と同種のことが、この孤立した別荘でも起きていたと考えられる。

『失踪』は、キャシーの失踪事件の謎を、「語り

手の私」の「仮説」と「証拠」をまじえながら、神のように何でも見通している視点からではなく、おもにジョンの限定された視点から語っている。しかも、「語り手の私」が「4年間の懸命の努力の後でさえも、私に残されたものは推測と可能性を超えるものはほとんど無かった」(O'Brien, 1994: 30)と告白しているように、謎は謎のまま残っている。

すなわち、この小説は、謎が常にはらむ「次はどうなるのか?」というサスペンスで、読者を引っ張ってゆく作品なのだ。そして、その謎を構成している大きな要素が、戦争トラウマが生み出す症状とその結果である。トラウマと折り合いをつけて、長い間ふつうの暮らしが何とかできていても、ふたたび心に大きな傷を受けると、とつぜん最悪の症状が現出する。周囲の人間には謎と思えるそういう出来事が、作品全体のサスペンスを生み出すのに大きく貢献している。

この作品は1994年に出版された。戦争トラウマがPTSDとして公式に病名と認められてから14年がたっている。また1992年には、戦争によるトラウマを扱ったハーマンの名著『心的外傷と回復』(*Trauma and Recovery*)が専門家の枠を超えたベストセラーになった。この作品が出版されるころには、世の中の多くの人が、戦争トラウマにかんする知識をある程度すでに獲得していたのだ。

だからこの作品では、戦争トラウマが存在することや、それから派生する悲劇の存在を訴えかけることは作品のテーマではなくなっている。読者がそうした知識をもっているのを前提にした作品なのだ。戦争トラウマは、作品のサスペンスを高めるための1つの要素になっている。

7. おわりに

米国が経験してきた4つのおもな戦争、南北戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦、ベトナム戦争を描いた文学作品を、それぞれ選んで、戦争

によるトラウマをどのように描いているのか、読者はその作品にどのように反応しているのかを中心に検討してきた。

南北戦争を描いた長編『赤い武功章』では、戦争トラウマの症状が、18歳の兵士ヘンリーを通して、自然主義作家クレインの事実や本能を直視する筆によって、リアルに描かれている。しかし時代の制約から、戦争トラウマは、作品のテーマとはならず、大人になるために克服された障害の1つとして扱われている。この作品は、その根底において、戦争トラウマを成熟した大人になるための試練として肯定的に捉えている。そして読者も、その方向で理解してきた。そこに特徴がある。

総力戦となった第一次世界大戦では、戦争トラウマに対する世間の関心も高まり、それをテーマにした戯曲『シェルショック』のような作品も生まれ始めた。そうした作品のなかに中編「メイ・デー」がある。この作品の主人公からは、世間の人びとが戦争トラウマに無関心で理解しようとはしないこと、それに苦しむ元兵士は、復員後の振舞いだけから判断されて、意志薄弱な人生の落後者とみなされること、たとえ自殺してもそのトラウマが原因だとはみなされないことが分かる。そうしたことは、作者の憤りとともに、わりと率直に描かれているにもかかわらず、読者にはきちんと伝わっているとはいいがたい。それが現状だ。

第二次世界大戦については、短編「バナナフィッシュに最適の日」を取りあげた。この作品は、戦争トラウマに苦しむ帰還兵士は、唐突に自殺を試みることがあること、また、戦後の平和な世の中になってしばらく経っても、そのトラウマによる悲劇に帰還兵士やその家族が見舞われることがあるのを伝えている。同時に、世の中の人びとは、それに苦しむ帰還兵士を社会から排除しようとしたり、せいぜいのところ、彼らの苦しみに無関心で、理解しようとはしないことを伝えようとしている。

作品から読みとれるそうしたメッセージは、前の「メイ・デー」と重なるところがあるが、読者

には未だにじゅうぶん届いてはいない。シーモアの自殺の謎という側面だけが注目されるくらいがある。たしかに、戦争によるトラウマは定期的に忘れられてきたのだ。そのことも、この作品に対する読者の反応から分かる。

ベトナム戦争を描いた『失踪』も、先の2つの作品と同じように、戦争トラウマの症状とそのトラウマが帰還兵士とその周囲の人間に悲劇をもたらすのを語っている。だが、そのことを語っているが、主目的のテーマとはなっていない。そうしたトラウマにかんする情報は、読者がすでに知っているのを前提とされている。その情報は、この作品のサスペンスとミステリーを構成するための1つの要素となっているのだ。

このように、4つの戦争において、戦争によるトラウマは、時代背景によって、その取り扱われ方が変化しているのが明らかになった。また、それによって、そのトラウマが読まれる読まれ方も、それぞれ違ったものになっていることも明らかになった。

ひるがえって日本の場合について考えると、帰還兵士の戦争トラウマを正面から扱った小説を、大岡昇平の『野火』(1951年)を除けば、寡聞にしてわたしは知らない。しかし、そのことは、日本の兵士には戦争によるトラウマが存在しなかったのを意味するのではない。それに苦しむ兵士は多くいた。

たとえば、2004年から2006年までイラクの「非戦闘地域」に派遣された陸上自衛隊員約5,500人の内、帰国後の2015年3月末までに21人が自殺しているからだ(『答弁本文情報』2018年)。もちろん政府の公式な見解は、イラク派遣と自殺との因果関係を特定するのは「困難な場合が多い」としている(中村, 2018: 5)。しかしPTSDの病名が決められたときも、戦争と症状のちよくせつの因果関係は証明できていなかった(Young, 1995: 5)。つまり21名の内のかなり人が、戦争トラウマが原因となつての自死だったと考えられ

る。

ところが日本政府は現在ですら、戦争トラウマによる自死を認めるのに消極的なのだ。こういう日本の風土が、そして精神力が強調された皇軍兵士という考え方(一ノ瀬 2014: 7-13)が、戦争によるトラウマをテーマにした作品が日本で生まれにくかった大きな要因だったと思われる。

参考文献

- Alexander, Paul (1999) *Salinger: A Biography*. St. Martin's Griffin.
- 『朝日新聞』(2002)「帰還した3人相次ぎ妻殺害」7月27日(夕刊).
- Binneveld, Hans (1997) *From Shell Shock to Combat Stress*. Trans. John O'Kane. Amsterdam UP.
- Cohen, Samuel (2007) Triumph and Trauma: *In the Lake of the Woods and History*. *Clio*, **36** (2), 219-36.
- Crane, Stephen (2008) *The Red Badge of Courage*. 1895. Norton Critical Edition. W. W. Norton.
- Farrell, Susan E. (2011) *Critical Companion to Tim O'Brien: A Literary Reference to His Life and Work*. Facts On File.
- Fitzgerald, Francis S. (1989a) Bernice Bobs Her Hair. 1919. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J. Bruccoli. Scribner's, 25-47.
- Fitzgerald, Francis S. (1989b) May Day. 1920. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J. Bruccoli. Scribner's, 97-141.
- Fitzgerald, Francis S. (2002) *Tales of Jazz Age*. 1922. Ed. James L. West III. Cambridge UP.
- Franklin, Bruce H. (1994) Plausibility of Denial: Tim O'Brien, My Lai, and America. *The Progressive*, **58** (12), 40-44.
- Gervais, Ronald J. (1985) The Socialist and the Silk Stockings: Fitzgerald's Double Allegiance. *Modern Critical Views: F. Scott Fitzgerald*. Ed. Harold Bloom. Chelsea House, 176-80.
- Gwynn, Frederick L. and Blotner, Joseph L. (1958) *The Fiction of J. D. Salinger*. U. of Pittsburgh P.
- Heberle, Mark. A. (2001) *A Trauma Artist Tim O'Brien and the Fiction of Vietnam*. U of Iowa P.
- Herman, Judith (1997) *Trauma and Recovery*. 1992.

- Basic Books.
- Herzog, Toby C. (1997) *Tim O'Brien*. Twayne.
- Herzog, Toby C. (2000) Tim O'Brien's 'True Lies' (?). *Modern Fiction Studies*, **46** (4), 893-916.
- 一ノ瀬俊也 (2014) 『日本軍と日本兵』講談社現代新書.
- Melley, Timothy (2003) Postmodern Amnesia: Trauma and Forgetting in Tim O'Brien's *In the Lake of the woods*. *Contemporary Literature*, **44** (1), 106-31.
- 中村江里 (2018) 『戦争とトラウマ』吉川弘文館.
- The New York Times* (1921) War Nerve Cases Difficult to Treat. August 21, 1921.
- The New York Times* (1921) Shell-Shocked Major Tries Suicide in Hotel. August 31, 1921.
- O'Brien, Tim (1994) *In the Lake of the Woods*. Houghton Mifflin Harcourt.
- O'Brien, Tim (2009) *The Things They Carried*. 1990. Houghton Mifflin Harcourt.
- O'Neill, Eugene (1988) *Eugene O'Neill: Complete Plays 1913-1920*. Library of America.
- Piwinski, David J. (2000) My Lai, Flies, and Beelzebub in Tim O'Brien's *In the Lake of the Woods*. *War, Literature & Arts: An International Journal of the Humanities*, **12** (2), 196-202.
- 利沢行夫 (1978) 『J・D・サリンジャー』冬樹社.
- 斎藤学 (1996) 『アダルト・チルドレンと家族』学陽書房.
- Salinger, Jerome D. (1991a) A Perfect Day for Bananafish. *Nine Stories*. 1953. Little, Brown, 3-18.
- Salinger, Jerome D. (1991b) For Esmé - with Love and Squalor. *Nine Stories*. 1953. Little, Brown, 87-114.
- Shiraldi, Glenn R. (2000) *The Post-Traumatic Stress Disorder Source Book*. Lowell House.
- Shaalán, Ban S. (2020) De-realized Self in Tim O'Brien's *In the Lake of Woods*. *Al-Adab Journal*, (132), 113-24.
- Shi, Long (2019) Study on Naturalism in *The Red Badge of Courage*. *Advances in Social Science, Education and Humanities Research*, **368**, 90-93.
- Shields, David and Salerno, Shane (2013) *Salinger*. Simon & Schuster.
- Sklar, Robert (1967) *F. Scott Fitzgerald: The Last Laocoon*. Oxford UP.
- Slawenski, Kenneth (2010) *J. D. Salinger: A Life*. Random House.
- Smith, Patrick A. (2005) *Tim O'Brien: A Critical Companion*. Greenwood Press.
- 『答弁本文情報・衆議院』(2015)「衆議院議員阿部知子君提出派遣自衛官の自殺率の算出及び比較等に関する質問に対する答弁書」7月10日. Web. (https://Shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/b189305.htm) 2020/8/1.
- Turnbull, Andrew (2004) *Scott Fitzgerald*. Vintage.
- Tuttleton, James W. (1982) Seeing Slightly Red: Fitzgerald's 'May Day.' *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. Ed. Jackson R. Bryer. U of Wisconsin P, 181-97.
- 上西哲雄 (1996) 「“May Day”とその時代」『英語青年』1996年10月号, 20-22.
- Wenke, John (1991) *J. D. Salinger: A Study of the Short Fiction*. Twayne.
- Wiegand, William (1963) The Cures for Banana Fever. *Salinger*. Ed. Henry Anatol Grunwald. Harper, 115-36.
- Worthington, Marjorie (2009) The Democratic Meta-Narrator in *In the Lake of the Woods*. *Explicator*, **67** (2), 131-43.
- Young, Allan (1995) *The Harmony of Illusions: Inventing Post-Traumatic Stress Disorder*. Princeton UP.
- Young, William (2006) Missing in Action: Vietnam and Sadism in Tim O'Brien's *In the Lake of the Wood*. *Midwest Quarterly*, **47** (2), 131-43.

The Trauma of Four Wars in American Fiction

Shoji Noma

Former Professor, Kyoto Prefectural University and Bukkyo University

This paper examines how American stories depict war trauma inflicted by four major conflicts: the Civil War, World War I, World War II and the Vietnam War. It also studies how descriptions of war trauma were interpreted by contemporary readers. In the Civil War novel, war trauma is portrayed realistically, but its belligerent atmosphere prevented it from becoming the central theme of the story: it is portrayed positively as a part of the passage to adulthood, and readers have received it as such. Rising public concerns about war trauma during WWI, however, made it a significant theme of the First and Second World War narratives, which factually describe war trauma and its tragic aftereffects; nonetheless, readers could not fully appreciate the theme. The Vietnam war novel presumes its readers understand war trauma and its aftereffects. Thus, instead of being the focus, the theme is used as a means to heighten the suspense and mystery of the novel.

Key words: war trauma, four wars, Crane's *The Red Badge of Courage*, Fitzgerald's "May Day," Salinger's "A Perfect Day for Bananafish," O'Brien's *In the Lake of Woods*.